

# 北海道自閉症協会

## 創設50周年記念行事「つなぐ」

### 研修報告



#### 1部 講演 加藤 潔氏

##### 「自閉症の方にとって何をつないでいけばいいのか～歴史・支援・人～」

「つなぐ」をテーマに、自閉症の歴史や研究を軸として「行政・支援者のありかた・関係者」の視点からお話しされている。

特に支援者のあり方については、普段業務を行なっている中で感じていた疑問と重なることが多く発見や共感があった。

「認知度・理解度」について、昔に比べて誰もが気軽に個人の意見を発信できる時代、当事者やご家族のメッセージが世間に広がりやすく、認知度は上がっているが、理解度は昔とそんなに変わってない、加藤氏の「そんなに理解を求めなくても・・・邪険にしなければお互いに」という言葉を聞いて、利用者との外出や旅行を思い出しました。引率時、どうしても場にそぐわない行動に出してしまう方がいても、周囲の方が「よく分からないけど、そっとしておこう」と言う空気が、引率側としてとてもありがたいと思います。事前の準備で回避できそうなことは行いますが、それでもすべての行動は予想できません。毎回行く先々で「この方は、こういう方で～」など会う人・すれ違う人全員に周知して納得してもらうなど不可能なので、「そんなに理解を求めなくても・・・」という言葉は響いた。

「いいチームによくある光景」と題した話では、現在の自分の現場と照らし合わせて、傾聴した。「隙間の仕事を誰かが埋めている」と言う項目が目を惹いた。自分がやっても、誰がしている。それが当たり前になって、別に割り振りしないのに、その人だけが行っている。加藤氏は「その誰を固定してはいけない」と言っていた。固定を差せないためにはどうすればいいのか、現状行なっていることを一つ上げて共有する機会が必要だと思った。

加藤氏の「それできなくても、いいんじゃない」「相性のいい人と巡り合うのはごくまれ」「勝てなくても、負けなければいい」は、普段の支援で利用者に期待を含んだ目標を押し付けてしまう、一般の生活基準に合わせなくてはという波にのまれがちな考えから少し楽な視点を学びました。



## 2部 シンポジウム

### 医療、福祉、教育、保護者（学齢期、成人期）の5つの視点から

医療：早期療育の実践としてESDM（アーリースタートデンバーモデル）が紹介されていた。共同注意の確認で、隠していたおもちゃを見れるかどうか、注意を引いて見れるかどうかというVTRを見た。健常の子は、職の発した指先を見てその先に駆け出していたが、自閉の子は着目することなく職がおもちゃを持って動きをつけることで着目していた。そのような早期療育を受けて、次に次につなげていくこと重要性を感じました。

福祉：成人期の自閉症の方は、幼児期に適切な学習を受けてきてない印象がある。知的障がいの方法で教育支援されてきた。自発的なコミュニケーションの学習がなく、そもそもそれを学習する機会がなかった。

教育：全体の子どもの数は減ってないのに、特別支援学級を受ける子供が増えている。学校全体で学ぶ「支援すること、しなくてもいいこと」説明できなければ理解したところはいえない。未来を見据えた支援「構造化」「スケジュール」。どう未来に繋げるか。

医療、福祉、教育の3つに共通しているのは、早期に未来につながる支援を探して、学習することが、本人と家族の幸せにつながるという考えと捉えました。

また討論の場面では、今後は高齢化と言う課題に直面していること、ノウハウの積み重ねを活かせる「つながり」を持たなければならないという意見が交わされていました。

